

おひい図書館

No.150

発行 おひい図書館
代表 青木 和子
松本市牧の原1-10-4
TEL 047-311-0896
10/4/16

東日本大震災後の
(社)日本図書館協会の取り組み



資料提供 常世田良氏

3月11日に東日本を襲った大震災によって被災した図書館の復旧・復興を支援するため、常世田さん達は震災後まもなく現地を訪れ、状況を調査。被災地の暮らしと復興には的確な資料・情報の活用が有効に働くことの重要性を認識し、3月18日に「東日本大震災対策委員会(委員長は塩見昇日本図書館協会理事長)」を設置。以下の活動を行いました。

(1) 図書館の被害状況などの情報収集

- 集を伝達：図書館の被災状況や被災地への図書館サービス支援の取組みなどの情報を政府や関係機関・団体と連携して収集し、提供・伝達する。
- (2) 義援金の募集
- (3) 被災地の図書館への支援：子どもたちの癒し、困難な生活を強いられている人たちへの適切な書籍・資料・情報の提供は不可欠。図書館の連携協力調を活用して支援を働きかける。
- (4) 被災地の図書館がその機能を發揮できるように、政府や自治体等図書館の設立母体に、早急に条件を整えるよう要請する。：サービス態勢予算措置を求める。
- (5) 被災地への資料・情報について

て、公衆送信を活用して提供がで
きるよう関係者・関係団体に要請
し、合意形成に努めるとともに、
政府に特段の措置を求める。
(6) 被災地と全国を結ぶ情報交流の
場を開き、求めに応じた支援を具
体化する。
(7) 政府などに、図書館の復旧・復
興のための特別な対策を求める。
：政府には、図書館の復旧・復興
についての特別な施策を実施する
責任がある。また自治体など図書
館の設置母体は、図書館の復旧・
復興を後回しにすることなく、迅
速に対処する必要がある。

(社)日本図書館協会

「図書館キャンパン隊」派遣

派遣する被災地の選定は、岩手、
宮城・福島・千葉の県立図書館と調整の
上、決定する。

1. 概要

移動図書館車に絵本を含む資料

料を搭載し、被災地を巡り、成人・高齢者・子どもたちに図書・絵本・雑誌等の資料を届けると同時に、上映会・読みきかせやお話しの会を行う。

2.日程

一週間をユニットとし、複数のグループで回していく。

3.グループの構成

五名で構成、中一名は会計。

4.車両

移動図書館車(借用)、ワンボックスカー(スタッフの食糧等および睡眠場所として活用)

5.資料の調達

「大震災出版対策本部」より提供。全国の図書館・関係団体によびかけて確保。

※資料は子どもたちに渡し、まう場合もある。

6.ボランティア活動へのコンセンサス

県立図書館から被災地の情報を得ながら連携事業として実施。

ク、ボランティアの募集

自分の責任で参加。食事・寝袋・睡眠場所等は自ら確保。車両の運転・児童サービスが行なえる。自費で参加。キャブバン隊の規律を乱さない。以上の条件で募集し、日本図書館協会が選任する。

8.日本図書館協会の役割

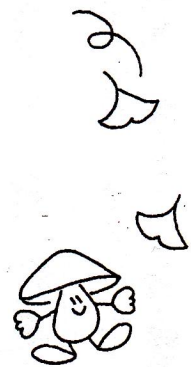
隊員を選任。隊員が所属する組織に対しボランティア活動参加の依頼文書を出す。被災地の県立図書館との連絡調整。車両等の借用に対する契約当事者となる。本部として隊員との連絡調整を行なう。ボランティア保険を確保する。

(2011年4月)

この活動は、状況の変化に合わせてながら、現在も引き続き行なわれています。

活動に関わっておられる皆様

のご尽力に、敬意を表します。本当にありがとうございます!! (まよの 青木和子)



「憲法記念日の集い」に思う

伊藤和子

今年の集いは、地震のために市民会館大ホールが使えず、関係者は大変な思いをされた由。それでも何とか実施できて、本当に良かった! 大田昌秀氏には、ぜひ分無理なお願いをして、その後、大丈夫だったか?心配してしまいました。85歳の御高齢ですから。しかし、使命感を持って活動を続けておられる方の話し振りは、昔と変わってないなと、感心しました。

10年位前(もつこ前かな?)、千葉市で講演会があり、亡くなられた山本菊代さんと聴きに行つたことがあります。その時も、る時間以上びっしりと、あの調子で話され、「沖縄問題とはこういうことだったのか!」と、自分の無知を恥じました。

烈しい地上戦にまき込まれた沖縄の人達のあまりの悲惨さに正視する勇氣がなかつたのですが、お話を聴いてから決心が付き、超勿化な湯浅さんの日程をこじ開けて、沖縄を案内していただいたこと、とても貴重な体験でした。正に「百聞は一見に如かず」です。

フビネリガマを始め、傷ましい戦跡は目を掩うばかりでしたが、特にシヨックを受けたのは、圧倒的な基地の存在でした。

視野の届く限り、フェンスで仕切られた広大な嘉手納基地。走っても走っても終着点の見えない程

のフェンスのこちら側には、幼稚園・小学・中学・大学等の校舎が建っているのです。あそこは、もともと文教地区ではなかつたのか?と思いました。

何年か前に、軍用機が着陸に失敗し、学校に突っ込み炎上した事件がありましたね。あの手の事故ストレスの事件は、日常茶飯事的に起きているのではないのでしょうか? ニュースにならなただけで。

世界一危険な通学路だと実感しました。

国家とは自国民を守る義務があるはずですが、あの基地を見ると、日本の政府が沖縄の人達を見捨てたという実感が湧いてきます。無責任国家です、全く。ゼビ、若し人達に現実の沖縄を見てきて欲しい。大田昌秀さんの話を聞いて欲しい。そのためにも、まだまだお元

気でいて下さい。聖路加病院の日野原先生の例もありますから、百歳までは大丈夫とは思いますが、そうしたら、アメリカ軍がいなくなる沖縄を再び見る事ができるかもしれません。一日でも早くそんな日が来るよう、私もできることをしたいと、心からそう思いました。

投稿

思い出の旧大英図書館

(イギリス在住) 山本光子

私は、1973年に2年の予定でロンドンに遊学した。その後、日本に戻らなければならぬという理由が見つからないまま、今はイングリランドの寒村の畑の中の一軒家で下宿生活を送っている。

「遊学」をしはらく続けた後、日系の銀行に現地採用の正規社員として採用された。しかし、ある日突然、20数年後の定年退職の日

にも同じ仕事をしている自分の姿が見えてしまった。そして、若いころ、40歳まで勉強を続けようと考えていたことを思い出した。

当時、イギリスでは、米国から入ってきた女性学の搖籃期。ロンドンの中心地の専門学校（現在は大学の）、夜間の女性学ディプロマ課程で勉強することにした。

ここで知ったのが、85年出版のウィリアム・トムソンの『人類の半分、女性』の許え：とという、女性参政権を支持する論文であった。この本は絶版で、一番気軽に目にするのができるのは、日本の国会図書館に当たる大英図書館で閲覧することであった。そのころ、大英博物館の中にあつた旧大英図書館は、研究者専用のエリート図書館で、私は指導教授から紹介状をもらい、顔写真入りの入館証を手に入れた。

図書館は、迷路のような廊下程

由の小閲覧室やタイプライター室は、博物館のどこに位置するのかは皆自分からなかつたが、中心は、建物のご真ん中のドームを天井とする円形閲覧室であつた。かたりの円周内側は、わずかな部分を除いて、書棚が、3階にまたがってずらりと並んでいた。この円形閲覧室は、閲覧室としては適性に欠けていた。何しろ、筆記用具を落としたりだけで、音が大きな室内中に反響するのだから。

その当時ロンドンでは、アイランド粉争でテロの爆弾事件が起こつたりして、公共の建物は、どこも、入る時に持ち物検査があつた。大英博物館も例外ではなかつた。それで、図書館の閲覧者は、大英博物館の入り口で、当然、持ち込む物を調べられたが、図書館を後にする時には、図書館の出入り口で、今

度は、持ち出し物を調べられるという経験をした。

トムソンの本は、読んでいろいろちに、手元に置いておきたい本になつた。私は閲覧から写本に方向転換をし、仕事の後、ハイヒール姿に、左肩にバッグ、右手にタイプライターを持って、図書館に通つた。そのうちに、腰の辺りに痛みを感じた。これは危ういと、腰痛体操の新聞記事を参考に、腹筋運動などの運動を毎日繰り返したところ、痛みはなくなった。

結局、退職して、地方都市の大学の女性学修士課程に入学することにした。

トムソンの本は、タイプライターを使つての写本では、指だけが機械的に動くだけで、手書きの写本とは違って、内容は頭に入つてこなかつた。今もって、改めて読みたい本である。

